

IV-94 都市地域開発におけるインテリジェント シティ概念の導入に関する一考察

京都大学 正員 春名 攻

1. 本考察の背景

今日のように社会システムが高度に複雑化した現時点で、多様な変化を示す社会経済動向を的確にキャッチし、社会の発展・維持に向けての適正な対応を、的確に示せるような活性化した活動機構を有することは大変困難なことと言える。都市地域の開発も、変化の激しい社会情勢を乗越えて、望ましい将来象をめざしての戦略的行動がとれるように、“場”としてのまちづくり・地域づくりを行なっていかなければならないと考える。

高度情報化時代という新しい時代を迎えて、上述のようなポテンシャルの高いまちづくりをめざした場合、『情報通信技術の進歩』や『情報集積の成果』を生かすような“枠組み”あるいは“仕掛け”を、都市地域開発の中に構築・整備していくことが地域活動を活性化していく上での効果的な方策となつてこよう。本稿ではこのような観点から、建設省を中心に制度化され政策として推進され、実施に移され始めた『インテリジェントシティ』の概念と、その概念を導入したまちづくりの方法に関する一、二の考察を、ニュータウン開発事業を例にとつて若干考察することとする。

2. インテリジェントシティと都市基盤

我々のような土木建設分野から“まちづくり”をみる場合、情報通信技術の発達や情報集積の成果をどう活用して、活動水準が高く住みやすい“まちづくり”を行なっていくかということを考えるのが一般的である。これは、情報通信関連の技術者・研究者が、その技術進歩の成果に立脚して、新しい機能システムの可能性と、それを実現する『施設・設備系』や『運用体制・仕組み』を提案することとは大いに異なっている。我々は、これらの提案を活用する『ユーザー』の立場から、技術進歩の成果を取入れたまちづくりの方法や実施策を検討する役割を担っている。インテリジェントシティの概念に対しても、“アイデア”としての構想を受けて、現実的には都市開発計画の検討において、『都市のインテリジェント化の方法』に関する検討を行なうこととする。

さて、このような都市のインテリジェント化を検討するにあたっては、まず『都市のインテリジェント化』とは具体的にどのようなことをさすのかを明らかにすることが重要である。この答えが果して、『オフィスオートメーション（OA）』や『ファクトリーオートメーション（FA）』、さらには『ホームオートメーション（HA）』の実現なのであろうか。また、家庭や企業さらには社会システムでの新しい“情報通信サービス関連事業”の実現化なのであろうか、等々に関して本格的な検討を加えて、我々の任務とするところの基礎整備の計画や実施の中でどう対応していくべきかを分析し、評価・総合していかなければならないであろう。すなわち、従来の物的基盤（道路・鉄道・港湾・下水道・防災施設・公園等々の施設や、住宅・商業用地etc.）の整備に加えて、情報通信施設を始めとする情報基盤を都市の社会基盤施設と考えていくことが必要であり、これを前者施設系と複合させた形で整備することを検討していくことが重要となってくるであろう。

すなわち、『都市のインテリジェント化』とは、高度情報化社会の中で、我々がこれまで目指してきた効率的で安全快適な社会システムづくりを、著しく発展した情報通信技術や情報集積の成果をうまく活用して、より高度な今日的な活動を創出しようとする都市とするように、情報基盤をも含んだ複合的な社会基盤整備を行なうことであると言える。

3. インテリジェントシティ概念を導入したニュータウン計画の研究プロセスの判例

次に示す図には、筆者が関係しているニュータウン開発事業の構想計画へインテリジェントシティ概念を導入し、新しい今日的なニュータウンづくりを研究するために採用した研究プロセスである。ここでは、従来からの都市開発に関する計画的検討のプロセス（右部の流れ）については簡単に記述しており、インテリジェントシティ構想の検討プロセス（左部の流れ）と、最も重要な両者の関連関係に対する検討についてはある程度詳しく記述した。

紙面の関係上、これ以上詳しく説明できないので、講演時にはこの検討の具体的内容を示しながら説明することとする。

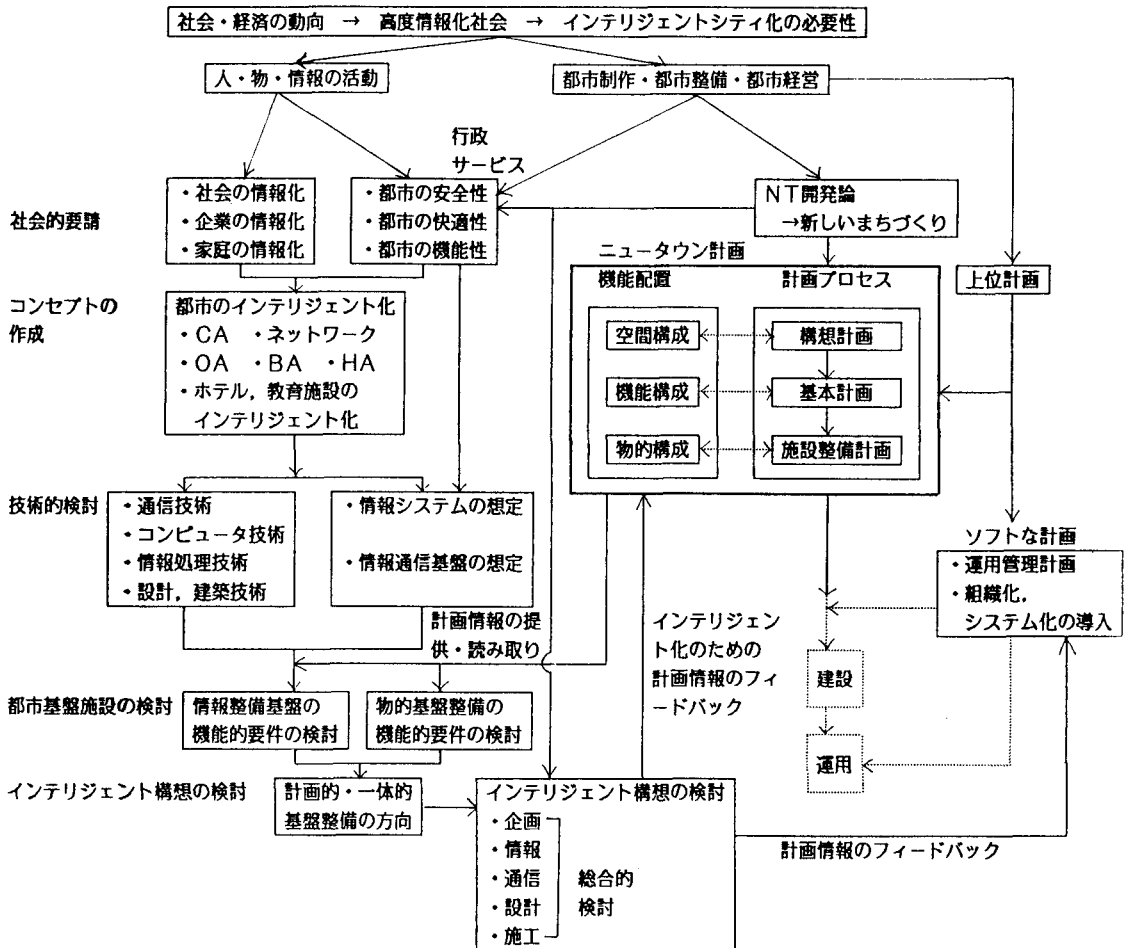


図 ニュータウン開発におけるインテリジェントシティ概念導入のプロセス